

いーちゃんへ

ラジオネーム：いんらん

先日、家の掃除をしていたら、たまたま出てきたピンクのケータイ。

その隣には、あなたからもらった、大きめのクマのストラップが顔を覗かせていて……「そっか、これだけは捨てずにいたんだ」と充電してみよう、

あなたとの思い出がよみがえりました。それをきっかけに手紙を書いてみることにします。

高校2年の夏。あなたに一目ぼれしていた私は、どうしてもメールアドレスを渡したくて、友達と作戦をたてる毎日でした。考えなくても考えなくても、いい案は見つからず、結局勇気を出して直接渡したんだっけ？

そのときの、あなたの鳩が豆鉄砲を食らったような顔。今でも覚えてる。

「あ、これはメールが来ることはないな」と半分諦めていました。

それでも、少しの可能性を信じて、ずっとメールが届いていないか、センターに問い合わせていたんだよね。かなりしつこく問い合わせたの返ってくる答えは、「新着メールはありません」だった。

なにがきっかけだったのか、1週間後、突然メールをくれたよね。

「やっばり、お前とメールしてみたいなと思ってね」

絵文字も全くないそっけない文章にめなだらしいねを感じました。

それ以来、頻繁にメールするようになって、私は親を説得して、メール定額のプランに替えてもらったのを覚えてる。

あなた専用の着信音に設定して、その着信音が鳴った時の胸の高鳴りといったら、もうそれはすごいものだったよ。

あなたが事故で亡くなったと聞いてから、捨てられずにいた、このケータイ。最近、充電するのこともなくなつて、押し入れの奥底にしまっておいたけど、きつと、あなたが思い出してって伝えたかったのかもしれないね。

小さい画面を見ながらの胸の高鳴り、日常の何気ないやり取り、忘れていないよ。

今は、スマートフォンが主流になって、もっともっと便利になつてい、メールでのやり取りなんて、全くしなくなつたんだ。

“センターに問い合わせ”なんかしなくても、メッセージは届へて、相手がメッセージを読んだかどうかわかる機能まである。

便利な一方で、どこかそっけなさも感じるんだよね。

もし可能ならば、あなたとまた、メールがしたい。それも、あの頃のジャンクのケータイでね。今では感じる感じが出来なくなった、あの胸の高鳴りを味わわせてくれてありがとう。